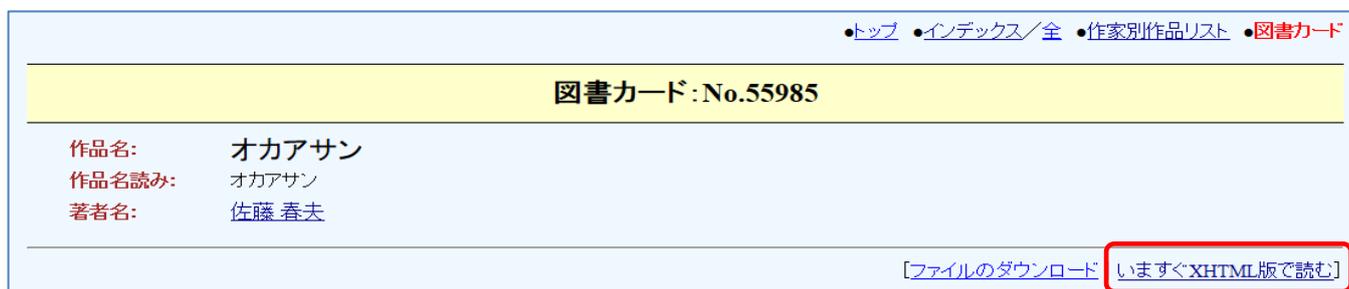


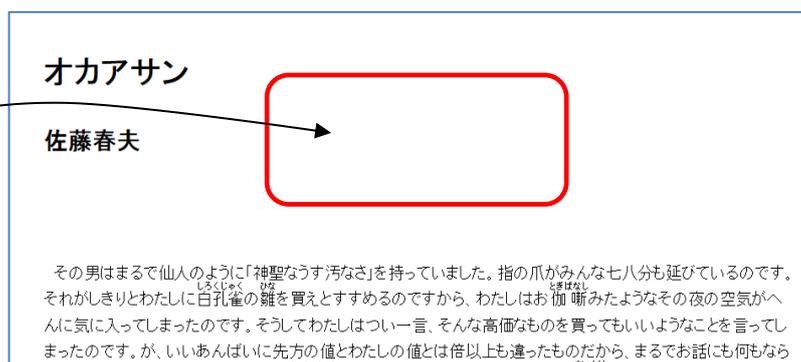
「文豪の探偵小説」でワードの学習

青空文庫の電子図書を利用して、ワード文書への画像挿入や表紙の挿入を学習します。今回の図書は、「文豪の探偵小説」に収録されている面白い短編小説です。

1. インターネットで青空文庫を開く。作家名:佐藤春夫、作品名:オカアサン とクリック。「オカアサン」の図書カードが表示されるので、「いますぐXHTML版で読む」をクリック。

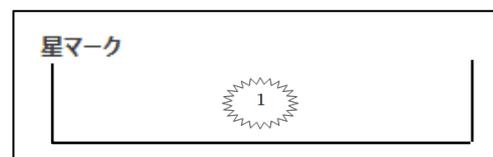
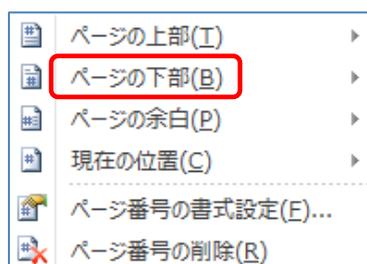
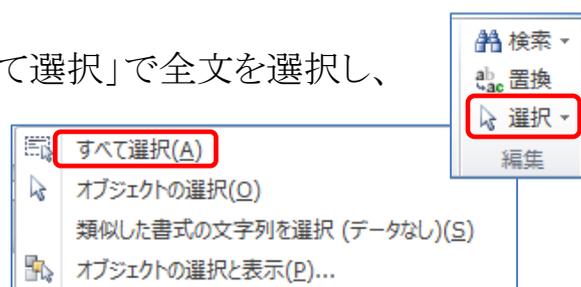


小説「オカアサン」が表示される。
余白部分を「右クリック」→
「総てを選択」→再度「右クリック」
→「コピー」とクリックする。



2. ワードを起動して小説「オカアサン」を貼り付けて編集する。

- (1) ワード面を右クリック→「貼り付け」とクリックして、1でコピーした小説文を貼り付ける。
- (2) ページ設定:A4縦、余白は上下左右20mm。
- (3) ワードの「ホーム」→「編集」→「選択」→「すべて選択」で全文を選択し、
フォントサイズを「14」に変更する。
- (4) 作品名と作家名のフォントを各々「24」、「18」に変更(元に戻す)。
- (5) 作家名から本文の間の改行を一つ減らす。
- (6) 「挿入」→「ヘッダーとフッター」/「ページ番号」→「ページ下部」→「星マーク」とする。



- (7) ヘッダーとフッターを閉じる。

(注) 印刷プレビューでページ番号の位置が妥当かどうかを確認、本文との間隔が少ない場合は、ページ設定の下側余白を大きくする、ページ番号位置を下に下げる などの調整を行う。

3. 本文に挿絵を入れる ― 「パソコン教室テキスト一覧」頁から「挿入図」をダウンロード。



図1



図2



図3



図4



図5

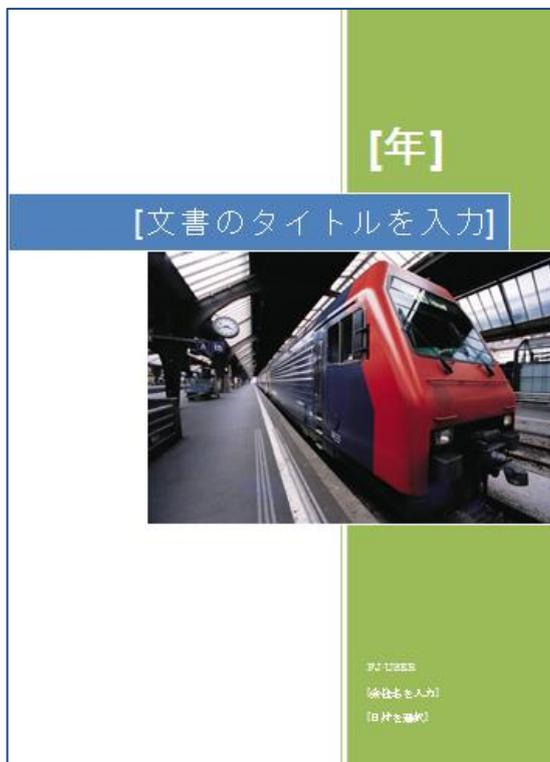


図6

- (1) 図1を頁1に挿入。左右を反転する。文字列の折り返し→四角。
- (2) 図2を頁2と頁3に挿入。文字列の折り返し→四角。
- (3) 図3を頁3に挿入。文字列の折り返し→四角。
- (4) 図4を2枚と図5を頁8に挿入。図4をトリミングし配列・向きを調整。文字列の折り返し→前面。
- (5) 図1を頁9に挿入。180度回転させる。文字列の折り返し→四角。
- (6) 図6～図6c は4項で表紙用に使用。図6c(使いたい図)を右クリックし「図として保存」しておく。

4. 表紙の挿入 ― 「パソコン教室テキスト一覧」頁から「挿入図」をダウンロード。

- (1) 「挿入」→「表紙」→「モーション」とクリック。 ― ― ― 表紙が挿入される(下図左)。



- (2) 電車の画像を右クリック→「図の変更」→「図6c」を選択→「挿入」とクリック。
 挿入した画像をクリック→「図ツール」→「アート効果」→「テキストライザー」で布地状にする。
 更に、画像クリック→「図ツール」→「図のスタイル」で、「対角を丸めた四角形」とする。
 - (3) 緑色の箇所をクリックし「描画ツール」→「図形の塗りつぶし」で色を変更。
 - (4) 作品名、作者名などを入力して表紙が完成(右上図)。
- 【備考】図6(透明背景)使用の場合、図の書式設定で背景色を任意の色に変更できます。

補足 <挿絵の挿入場所>

オカアサン

佐藤春夫

頁1

その男はまるで仙人のように「神聖なうす汚なさ」を帯っていました。指の爪がみんな七八分も延びているのです。それがしきりとわたしに「白孔雀の籠を買えとすめるのですから、わたしはお預けみたようなその夜の空気がへんに気に入ってしまったのです。そしてわたしはつい一言、そんな高価なものを買ってもいいようなことを言ってしまったのです。が、いいあんばいに先方の値とわたしの値とは倍以上も違ったものだから、まるでお話にも何もならずじまったのです。それでこの話は必だんになったのですが、しかし小鳥屋の才取をするこの仙人は、わたしに籠を売ってついでに「おまけ」は思いきらなかつたものと見えます。一週間ばかりして今度はわたしに籠を買えとすめて来たのです。

仙人は初めこの籠を待って来て、これを紹介しました——十やそこらは完全に口を利く、その発音は明確で微妙である。その上に何だかわからないが長いこと味りもする。歌は「ハトポッポ、ハトポッポ」とそれだけしか歌えないけれども、その調子の自然なところが、この籠の有望なところだ。また三歳ぐらいな若鳥だと思ふから仕込みさえすれば、籠語の一つぐらいは完全に歌うだろう。この籠の名は「ロオラ」というのだ……と、そこで「仙人」はわたしのうちの女中にビスケットを買って来させて、それを籠に見せながら言うのです。



1

頁2

「ロオラや」
すると籠は体をくねらせてあまるい大きなくちばしを籠の方へ押しつけながら（ふんぞりをついたような形で）

「ロオラや！」
それがわたしに三十四五ぐらいな夫人の気取ったつくり声を思わせました。籠は仙人の話によると雄だそうですが、わたしにはその声と身振とのためにどうしても、女としか思えませんでした。大きな籠のぐるりを、金太郎（わたしのうちの神の名です）はぐるぐるまわりながら伏えました。



ロオラは相手のその狂暴には一向驚きもしないで、彼女自身も犬の伏える真似をもって応酬しました。金太郎が籠になって籠に顔を押しつけるとロオラはいまなり最もゴロテスな嘴でそれに立向ったので、金太郎はびくりにして後退りました。ロオラは金太郎の狼狽を見ると、
「ホ、ホ、ホ、ホ」

と、笑い出しました。籠がときをつくる時のように、上を見上げて唇を動かしてダンスを踊りました。それから、くると下向きになりながら体のむきを変え、また尾を扇のようにひらいてダンスを踊り、また回転しつづけるのです。

「ね、面白いでしょう」
仙人が僕の目つきを見て、すかさず言う。
こういうわけでも多少無理におしつけられた形でした。それになかなか画がったの

2

頁3

です。わたしは多少後悔しました。妻はわたしの感じを見て、わたしを例によって調子にのって「おど」られたのだと「おど」たなきげんなのです。しかし、わたしはそれの世話をした仙人を、見かけこそすつ汚いが「おど」まで垢のついてる人物とは思わなかったし、それにこの黄帽子インコという種類は、一般に買のいい鳥だという事も知っていたものですから、わたしは一日や半日ではまた「おど」しませんでした。かえてわたしの今までの「おど」の鳥の経験で、いい鳥とはつまり買のいい鳥のこと、また彼等の買のいいというのは結局神経質ということに外ならないのだから、そういう鳥こそは得で買れるまでは、周囲の変化などのために一時「おど」かなくなったりする例がよくある——いづれそのうちには面白くなって来るだろう、と自分で慰めていたのです。何しろロオラはわたしには「おど」まなない様子で、わたしが何を言わせようとしても少しも返答はしないのです。ただ時々、金太郎やジョージ



る時、彼女も亦、犬の声を真似るぐらいでした。
次の日の朝、妻の話によると、ロオラが朝寝をしているうちに、籠の「ウ、ク、クク、ククク」というような声と、それが籠を呼ぶような「ト、ト、ト、ト、ト」という叫びとを真似たということでした。
「それから、まだ何かわからないことを申しました」と、おしげ（女中の名）が言います。
「わからぬ言葉って、何か日本の言葉ではないのか」
「いいえ、日本の言葉でございますの。『わたし……だわよ』というのですけれど、そ

3

頁8

「オカアサン」
「オカアサン」——
「ホ、ホ、ホ、ホ」



こういうのを聞くとわたしは、三人の女の子がお母さんと一緒にロオラの籠を取囲んで、日々いろいろな呼び方の「オカアサン」をロオラに言わせてみんなして笑い興がる様子のありさまを、空想することが出来るのです。
——しかし、この茶にはお母さんばかりいてお父さんはいない、お父さんはいないけれども赤ん坊がいるのです。——三つが種々四つぐらいの「ボーヤ」で、それが時折、聲を出すのです……

頁9

の妻には子供たちの生活をおもわせたのです。
きげんのいいロオラが、大きな籠の中をゴロテスな足とくちばしとで這いまわり、籠の天井にがさががたたま。
「ウツシ」
「ウツシ」
と笑い出した時には、不都合な様子と言葉とがわたしを笑わせました。
わたしはロオラを笑して、いつも、籠くようにと思って、自分でものをくれてやるのです。ビスケットだの、梅干だの、バナナだの、甘納豆だのをロオラは好みます。それ



それによって、よく買のオカアサンを、わたしはこをばう調子でこをばう調子で真似や、また、人な鳥などを買ったらしいのです。（——彼女、わたしの妻には子供がなかったのです。時々それをさびしがるようなことを言うことがあります）
要するにロオラのきれいな言葉はわたしには一つの家庭をおもわせたし、わたし

4